

# シティプロモーション

## 「地方創生実現のためのシティプロモーション」をテーマにシンポジウム開催

官民連携による組織「シティプロモーション自治体等連絡協議会」は、11月2日、東京・千代田区の千代田区立日比谷図書文化館で、首長シンポジウムを開催。首長や自治体職員、議員などが参加しました。基調講演やパネルディスカッションを通じ、「地方創生実現のためのシティプロモーション」について考えました。同協議会には現在、14の自治体と六つの民間企業が加盟しています。

■キーワードは「連携」  
シンポジウムのテーマは、「地方創生実現のためのシティプロモーション」各自治体の「知恵」と「工夫」を共有する。初めに「人口減少社会の地方行政」スケールメリットから「個性で勝負」



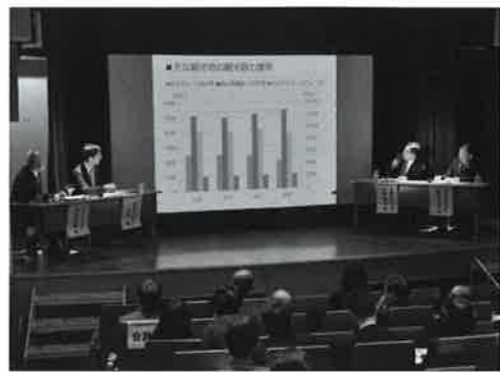
首長シンポジウムには、首長や自治体職員、議員などが参加した

の時代へ」と題し、時事通信社編集委員兼海外速報部長の小林伸年氏が基調講演。小林氏は、出生率や高齢者の動向など人口減少社会の現状をデータで解説した上で、「定住人口が増えなくても流動人口が増えれば活気づく」

「まあるものを磨き上げることが大切」と語り、地方創生に向けた振興策のポイントを指摘。自治体が生き残るためのキーワードとして「連携」を挙げ、「持っているものを生かすと同時に、持っていないものも資源になり得る。地域外の人に積極的に聞くことも効果的」「広域の課題に自治体同士で連携することで、いろいろな可能性が広がる」とアドバイスしました。

続くパネルディスカッションでは、3人の首長がパネリストとして登壇し、シティプロモーションの現状や成果について報告しました。

栃木県佐野市の岡部正英市長は、市のキャラクター「さのまる」による経済効果を挙げ、「キャラクターによる効果はゴールではない。プームに左右されない取り組みが大切」と語り、球技としての競技人



3人の首長によるパネルディスカッション

シティプロモーション自治体等連絡協議会  
<http://www.citypromotion.jp/>

ションに取り組んでいきたい」と抱負を語りました。

埼玉県三芳町の林佐雄町長は、都心から30キロ圏内に位置しながら田園風景が広がる町の強みを強調。地方創生のキーワードとして「人づくり」を挙げ、全国広報コンクールでの内閣総理大臣賞受賞などを例に、「職員と積極的に対話することで個々の能力を引き出し、日本人のまちづくりをめざす」と語りました。

これらを受けて、コーディネーターを務めた同協議会調査研究部会長の牧瀬穂氏は、「シティプロモーションは目的ではなく手段。人材や連携、メディアなど、さまざまな要素と掛け合わせることで、効果を高めることができる」と語りました。

シンポジウムでは特別講演として、関東・東北豪雨災害で被害に遭った茨城県境町の橋本正裕町長が、被災状況や復旧の進捗状況を報告しました。

## 「なごかと読めないまち」キャンペーンを展開中

養父市

兵庫県養父市は、読みにくい市名を逆にとり、「読めないまち」を宣言し、「なごかと読めないまち養父市キャンペーン」を展開しています。やぶ市観光協会のキャンペーンサイトでは、「養父市はようちち市へ」生まれ変わらせんとし、「養父市は、読みにくいまちとして、『ようちち市』『ようぶ市』はたまた『ぎぶ市』



「なごかと読めないまち養父市」キャンペーンサイト  
<http://www.yabu-kankou.jp/yomenai/>

と…本当によく間違われます。でも、『読めない』ってすばらしくないですか？『読めない』は、いわば、『予想外』。養父市は、全国のみなさまへ向け、胸を張って『読めないまち』を宣言します」などと語っています。

ユニークな事業としては、8月〜10月にかけて、ツイッターを活用し、養父市のユニークな読み間違いを募集する「究極の読み間違いコンテスト」を実施しました。

サイトでは「ここがすごい養父市」として、地域限定の規制緩和と産業の活性化を図る国家戦略特区として、全国6か所の特区の一つとして「中山間農業改革特区」に指定されたことを紹介。増加する耕作放棄地の解消に企業と一緒に取り組むなど、その役割をアピール。そのほか、住みやすさや自然が豊富な点も、「読めなかった！」をキーワードに活用しています。

養父市は、養父郡の4町が合併して2004年に誕生。県最高峰の「氷ノ山」、近代化産業遺産「明延鉱山探検坑道」などのスポットや、「朝倉山椒」但

馬牛」などの特産品があります。ちなみに、「やぶ医者」という言葉は養父市が語源で、その歴史にちなみ、養父市では毎年、若手医師の育成を目的に「やぶ医者大賞」が開催されています。

## 移住活動の様子をブログで紹介——長野市移住コンシェルジュプロジェクト

長野県長野市では、長野市の魅力を研究・発信している「ながの市の元気研究所」（愛称「ナガラボ」と長野市移住・定住相談デスクが連携し、長野市への移住を考えているモニター活動をウェブサイトで紹介することで、長野市への移住に関心を持ってもらう「長野市移住コンシェルジュプロジェクト」を展開しています。

「ナガラボ」は、定住人口の増加を目的とした「ながのシティプロモーション」の一環として実施されており、長野市のさまざまな魅力を取材し、発信しています。

「長野市移住コンシェルジュプロジェクト」では、移住を検討中のモニター組を募集。ナガラボ編集部と長野市移住・定住相談デスクが支援し、移住者が求めるさまざまな「ご縁をつなげていくのがねらいです。そのモニター」の移住活動の様子をプロジェクト



長野市移住コンシェルジュプロジェクト  
<http://nagano-citypromotion.com/move/>

ト担当者（ナガラボ編集部員）がブログで公開することで、長野市への移住に関心を高めてもらいます。

モニターについて、9月末の締め切りで募集したところ、県内や東京都、静岡県内などから計5組の応募がありました。5組にはプロジェクト担当者が面接を実施し、その様子もブログで伝えています。

10月にモニター2組を決定。当初は1組の予定でしたが、「希望する暮らしが、まったく違ったから」などの理由で2組採用することに。ブログでは、「長野市が多様な生活を実現できる、懐の広い土地」であることをアピールしています。

2組のうち1組は古民家を希望し、すでに応募の段階で長野市内に移住。移住者がその古民家を改築するためのアドバイスを求めていることや、農作業をするために機材が必要などをプロジェクト担当者がブログの中で紹介。ブログを見た人から情報提供を募るなど、ブログがつける役割を果たしています。